冬の日句解

素堂編

寛政九年刊

明治廿參年
四七月十日求
菅原義郎
清運堂主人

序

芭蕉翁の俳諧正風体を[illegible]
貞享乃冬の日[illegible]
[illegible]
の人々[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

史筒の隅にこそ徒なる魚の巣となれす
もはんしに平は道の情にしらしに實
ままに成乃言葉を言にしる歴作は言かう花に
角よ仮名のこの壮年の仮名風言ふ為
をせめ教年はり師に逢に破点の間に
初も成に成ものを古の成尋ねしを探
拙き方に懲に多古集の鶏に千う成
とりを白解に袖中よせに或人に
乙様ひに世の法けよりしるも頑僻の解
なる色に影は蕾の慈乃眼をとる
はるる色の慌さ新まはさ色
大一番はなみぬに成は辞に止めぬも
三番むのすに成顔なる梨者まに談に道定
を讃さ冊に成はに寛政印乃和に
泉松山聖二廉は棒孫川に流に雑集
はかりの筆に潤沢は乃言葉言

やうに對し先師の肖像を仰ぎ七部集
撰ぶ題し乞自序をこひ橘木に刻ませ
ものし給ふ深き所ありかの互ひに語の餘ふ
ゆゑ石竹男子補ひ給ひてんや

寛政乙卯夏且月　虻戸菴
素綾編

虻戸菴

冬ごもり　尾張五歌仙

冬ごもり金龍山の雨ぞ降る　泊
しのぶらしに人ぞ来ける　たか
伊賀人家さ伊賀人ぞ　むらし
狂奇此主此國ぞ　芭蕉
色ひ出ぞ中　作

狂句このらし乃為ハ行衾の枝ぞ折る

此句聖門らしの紀行に名護屋に入る色の浦
風吟すと伺ふ元禄元年秋の光陰れる
ゆゑハ雨ふるこゝろ出紙衣ハ風ふる出ぞ

此句の出る事ハ貞享甲子の秋八月江上の破家
を出るほとより旅立の日より風の吹そゝ
ろ寒ける事ハ涙の言葉の出るにて野分と
思しハ旅寄に對し身ハ何なるべし都より出
かしに加る旅立る身ハ古人行旅に於ても
のゝ嘆ハ加ゝし旅つまハせ傷し給ひし身
もしあるなるらん無數ハ世に宣へし旅寄の名人

雑そやとそんしの笠の名ある老　　野水

露白の言葉を語る時なるその旅雑そやとう
面も笑み山家の話をさし身る風雅人
の知りしるより昇下の言葉をとりな
して見對したる程なるんかとそんしそゝ
身もしおのれかなしした。こ通音なり

有明まても酒屋造るせて　　荷兮

露白の言葉を語りして笑をよ山家の顔を加へさ
しそれより見る酒造の上代林中の
式を見るしし雑をやより出る露雲上の言葉
を寄しりの雑あなんかは宣名にて
名の子の家を感涼し九曜の中乃水曜星は
曉昴星と晨甲出る星なり是を水司甲
通ふより水司るもの也宣の見る暁夕
の韻ハ句脚酒造の記ひ皆に水司る加り

また来明より勤るてかまさハまた明のあさなさま
けの冠をかよくのえ云八せまう

かしら乃霜をも始すふ赤る　童五

湯屋の門前穀運乃まるに並ぶる中よ赤ふるの
かしら我始まりふ湯さ女なりけん

朝鮮のほそりすむの白入れさ　杜国

雎なるしら見語すくさよあしらひ朝鮮の旅
それまてる絶のしかり其頃赤るハ朝鮮陈
の余情も何らんう

目孫ち察し子腥子茶我　州　正平

是ハ朝鮮乃地子定てる所の白おなる色ハ播州
とゝふ風土我茶我州と作まりしに出て八月末九月
乃尤し先朝子ハ秋毫ら紀と見さらりあふて下
是也とり目も茶州人の賞我ちゃりしと其の
微すなるむ

家鹿まて鳴子し當初次待ちうまで　野水

茶州人子向さる案門の志乃所なるへし嗚呼
世孫中秋の三五中と新らし田畑乃色の我州入
て竈乃かよめり　を振ハしたそこの秋の我ハ浮晋

ほさしれく餘りちと花鉄乃まかやなしやみや
まかせて候する病よ追ふ戒の傳ふ朝の雲夕
の雨に是非もなく候する人の亡銭得るか
な純真世の中の豊なる銭あまりすへん

髪生えやす容顔思ふ五月雨　芭蕉

是ハ蕉門の人銭業平乃件なりと見えしとか
思ひて髪銭もやすと作りたまへりし在五
中将二条乃后のすさみ人まで作りし事荒
注なりつくし后のをくりくち業平朝臣が
髪を切くなりて業平髪銭もやさむとるか
書なる中姉よてらせ哥捨へんと吉書の方

に下かけりまちれ此ある無名抄に在又此白銭唯の
声絶の人乃髪もやすとみへるハ還俗せよとする
面しさす純真不義なりしとく蕉門に不廃
哉

いりもの花難面しと乳銭三尺よ　重五

家に八心中たてん切し女乃髪と見る哉一世
かけし中も切ましくもなりなんよ恨つ
人眼銭愧思ひの凡髪も要なるらん

消えぬ卒塔婆にすこしく泣　荷兮

乳銭三尺より捨ておもむより白ひらし幼子ほ

芋掌に我歌毋ひ流なるゝ墓参る人涙我
見知しそゝゝ死ゝ二七日のゝちやたゝ辛
塔婆乃みらゝ雨雫のゝつろひなゝ乳ゝろ
ゝ懐ゝ古ゝゝなゝん

閑

西乃あゝのゝ丈ゝゝゝ我樹ゝ　芭蕉

眼我法ゝゝしゝ見ひゝゝの凡墓ゝ参する時ゝ我
見ゝゝ墓ゝ所の色ゝ俗せり弘法大師ゝ遺ゝゝ
我樹も松杉乃間ゝゝゝ見ゝゝ爛ゝ新のう
はるゝなゝん

何ゝしゝ八貧ゝ江ゝし　鹿家　杜国

あゝゝ丈ゝゝゝゝ我樹ゝゝの小ゝさゝの小家
ゝ我矢ひしゝ乃家内弘法ゝゝ我
物ゝ雪ゝ降ひ数ゝ物ゝの多ゝ大ゝ弘ゝ鶯ゝ
ゝ明ゝ月ゝゝゝ悪ゝく松の葉ゝゝ樹ゝ
清ゝ姿ゝ悪なゝん

田中なる小すんゝ柳　蕉笠

姿の姿ゝ見ゝ柳ゝ見ゝ
しゝゝ新ゝ小柳ゝ比ゝ
ゝ小すんゝ柳ゝ伊勢ゝ山田ゝ田中ゝ

雪ゝ舟引人ハちんゝゝ　野水

梢より見出す舟の艫向出しても舟に人いち
んも見えしれ見るまでなり京川堂まよ
見へ候

あまりかなしき揺る月細し　杜国

ゑりしなかりし薫る蓋の月揺るぎして
見出す海辺のまへし

傳さらし大野に懸りゐる　童五

あそこの年の月にさまよひなりの何所揺りの人
と見るかなしくなりし懐かりて有るまで訓海に
夕汐にもしく宿縁しての浄近辺の人
出所揺りなれ月のまに光明を会に
あすひとの年も重ねれ見へ候へん

二乃尼に近衛の花の盛りきく　野水

又天子の御の縁情かり寒し京すの法辨せしを二の尼と
云ひ派の法辨せしを二の尼と近すとそ

揺りあれ人のあまりくに岐阜のなとの主花
乃尼に何の事し方の来れ身乃くし
縁会御中の近衛乃花紙寒きる風流に縁り
さるなり西行桜の謡のまた近衛桑為乃桑桜
世の中へしをなり

蝶よ葉のとそうの鼻かむ　芭蕉

何八十年てる尼の色のしさ海くれてと無し出ぞ

源氏物語に対する云々の説と藤と
大ゐりいひしなり異かむとは源氏物
語なとに色濃き紫いとり濃く紫色に
異かるなる所の異かむものなり

紫物語の影すゝ新鶯なる　重五

新鶯乃色紫なるの中まゝ新
人の見ぬなるんう

今を限れ矢　紫をあいこ　荷兮

鶯の中に八鶯みるのもゝ歌の何
集ふ世に紫通るゝ色ゝ人の矢
紫を新しゝ人の及

あゝ次

盥人乃祀念の松吹形色　芭蕉

矢を弱ゝ歌八熊坂ら物見と松の色吹形色
八白紀紫ゝ色色紫歌の見哲身の弾
色金橋ゝ見ゝ矢紫詠ゝ矢ゝ言ゝ
物見乃私の親向思ゝ妙御ゝ

志光し宗祇若紫つゝし　杜国

宗祇の詠の八道の弾ゝ舞紫源の系紫ゝ
光ゝ濃ゝ道紀熊坂ゝ宗祇松ゝ詠ゝ対

するやのり碓氷井堂氏法師八雲等より三三
所西行ゝ道ゝ通ゝ和歌ゝ西時八雲者
てゝ無名抄ゝ見人結束て喜傳宗祇の歌
八碓氷井の流の末よゝ見侍ゝ

笠　如安ゝ　世阿弥ゝ　能ゝ

後人連哥の祥詳法師ゝ氏高平行
ゝ撰系義経撰ゝ千載のむゝ歌
作者ゝ笠ゝ法師ゝ

梶　村雨ゝ　能ゝ

村雨より雲ゝ見ゝ　唐　蒼　野水

とゝ人ゝ結ゝ八蒼歌さしたるゝ
孤雲獨去ゝの影なん

去ゝ　ゝ　ゝ　碎しゝ人の骨ゝ何　杜函

蒼の雲ゝ武化蒼なゝ人ゝ人ゝ人の骨なん
去ゝ　ゝ　ゝ

鶴　鶴八胡　孔　國　孔ゝ　重五

骨ゝ何ゝ骨ゝ系ゝ骨ゝ
八ゝ鶴ゝ鶴の甲ゝ法鶴八胡孔
用る鶴ゝ法ゝ新ゝ
鶴の亀ト影ゝ

雨ハ色ハ[illegible]の蟬なきけし　野水

鳥籠ハ胡桃ちらしの[illegible]の蟬なきけしと
いふなるべしいとふ[illegible]大[illegible]の蟬とこんも
對するらけ[illegible]ハ[illegible]ハ世俗ハ
ハ世常ハ[illegible]

秋水一斗漏そそぐ　芭蕉

此白秋と切[illegible]白ゆり秋ものや漏刻一
斗[illegible]
[illegible]

目赤乃赤の白う坊　重五

一斗ゆりそそぐ漏とも名ゆ赤の白一斗
八更ゆ[illegible]の目赤の赤の白なる
石川丈山ハ本朝詩の名人ゆ[illegible]
の赤の白と鹿裘稱せ[illegible]
[illegible]の赤山詩仙堂[illegible]

中年ハ[illegible]　若竹

丈山の友とする[illegible]
[illegible]

萩や木槿やとおもひさしをる人物なん

牛北に行ぬらふるゝの夕暮哉　芭蕉

蹄毫に成好人より白ひ〻牛を乗り〻道遥せし人北〻に成異ひ出る〻牛に成年ふ白ひなるらん或人北袖中集を今若の吟と〻出成年ふ歌〻

我の里して成しや落ゆん

若ゆかつる〻寄めいろちハ

今若ハ天智天皇北東乃皇子と云る説を考

箕面の滝のうを成いる〻ふ　杜国

牛の北年ふと云るより家北ハ海の傍なしる稲しをんん室北屋〻海を下毛佐野の北大平山乃樹下北唐天雄甲成いる室北屋山名大明神ハ本地弥陀咲耶姫なるを三柱の神なり無戸の里ゆ入る〻焼失ふちらひ北中に出ゆ出ゆ出るの里ゆしをふより家の屋しゆ海と中と〻ゆ上古甚毫ゆ異成る〻人北ゆ成とり咲ひ北しをすり仏人のゆ北彩りゆ彩と云る奥成ひ〻のゆ焼る門ゆ異しよりその法なるし成咲る〻人のゆをんゆさのゆるゆ北る〻異失ての後〻ゆ甚毫ゆ彩成艶ひ備しとを

秋のさをりの
さつまはたの面のむらたやま面白き事
たうこれ〳〵ろ成つゝ後〳〵
そきより東ゑ〳〵はれし成このゝ
ゐとなん室の原一面の神の氏
子ハ絶〳〵これしろ成樹ゝしゝ食せ
縁記ゝ云ゝ成世ゝもゐ作〳〵給し

我いの里明かされ星ゝ乃むら雁く　荷兮
されしろのゝをいゝゝ成ゝのなゝ人の神ゝ
子成中彩ゝゝ神前ゝ鈴成撞ゝ
我八七日明食ゝゝ成ゝ蒲ゝ夢ゝ

霊夢ゝ明方化現しゝ胎内ゝ入しゝ
見しゝゝゝゝ集れる紙なゝ

ゝゝハ妹乃眉かきゝ　野水

星成ゝゝむゝゝ乃人の親なる妹の
眉ゝゝ乃ゝゝゝ人ゝ田舎ゝ
何〳〵次京師の人のゝゝ乃ゝ

後ひゝゝ居湯ゝ志賀の寺灌ゝ　杜国

眉かゝゝゝゝ浴する周成人乃ゝ
人白紙ゝ志賀の山ゝ成風ゝ波入ゝ
浮ゝる蓮ゝ成孫ゝ乃ゝ撥ひ

[illegible]

あるん

廊下ハ蘇の新法なり　童五

湯殿つゝきに廊下蔵のうへ[illegible]

[illegible]

其二

[illegible]

壮年[illegible]

[illegible]

曲江對酒　杜子美

花外江頭坐不帰水精春殿轉霏微桃花細逐楊花落黄鳥時兼白鳥飛縱飲久判人共棄懶朝真与世相違交情笑覓滄州遠老大非傷未拂衣

野水

[illegible]詩の名唱歌会[illegible]

野水　[illegible]

前[illegible]致仕し[illegible]世[illegible]勤[illegible]

世[illegible]壮年[illegible]

年[illegible]降[illegible]

人の[illegible]

澤菴和尚の歌に
雪しろくれかゝりぬ京の古川竈を
めつらしと見るめそふりに春
此歌は京にこゝえかなひ給ふらん

霜

霜ふりて来るに見ゆる何のさうふ乃食　杜国

霜は白きこゝろ残りけり對しぬるものなし
これ白き節に心やすく来るの字成恐し衣食住
乃對ふしてさるに霜穢に食住は其の年の
比まて草の蔓垣に枯ぬる気色に何ふらん

野ゝ葉またきにつぬ宿蝶は羽折きて　芭蕉

霜に折る原より細き蝶の羽折きてさ
やかしこれ草花ぬる空に秋いのちとと心緒
ますさ海まとんれ微妙なり此貫三冬より通は
秋季より稲のたるらん

鶉

鶉なけきしく車乾きのり　荷兮

野ゝ草より見出して鶉は秋にも低く
ありて坤にするもの乾なるものは地を
遠く宿に残るゝ隣とふより車さ
ありしに帝に乾と長したるらん
ふけるは隣をなり都に四句は背三より
ききすることなく海のもし言葉のもかり

あつさ乃もと見ゆるのゆしすゑなりん

磨〻月稚子羯鼓をはやすらん　童五

車にあまる趣ある厳上人の姿なるべし

桑も〻を手折る　貞徳乃寫　正平

磨といふより貞徳と見るなるらん貞徳は松永弾正の孫にて連歌にも九條玖山乃奥儀を傳へりて花の下より自ら花頭磨と号し隠者乃寫貴にて洛中に五園を営ミしとかや梅園桃園首蓿園柿園芦園など家の上は白桃園乃趣なりん

雨ふれる沙の田螺浮りつゝ　杜国

芦乃宮家は泉水に沙の沼より舟のしたと呼称す作なるべし騒の大臣六條河原に陸奥乃しほがまを移し難波の浦より汐を汲ませて焼せしなと中奥にて或御館にて泉水に井ありて蛙を放ち汀の芦に汐の景を設けせられ或は御隠館の庭にまかなんと題尤貞徳の風流さるべし人六通音にてこめとよむべしくとしくめと読みの筆

奥払来はしる珊瑚をなくなく　野水

四方しの如月九度式部と異比よりもろ〳〵人
情の移しみちの花〳〵ゝと異比出る
品注なくとゝ有り

春雨〳〵ゝ語る花従弟なる男　荷兮

真乃如月紙なゝとふより陸奥産の傾城
を見出しゝ田舎客の言葉なつかしく春
立るを語る合見同なゝ孫の従弟なり影
の中みちのくの新出八二月の初の月よりかりしゝ
ゝ乃やなんとゝ紙ゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
歌〳〵ゝ余情深しなく唐詩五絶長
二十字の白も有べし

縁さゝ多ゝけ乃根張し　芭蕉

従弟同士といふより幼友ほいひ名つけの中
形りしゝ女のかゝ人なかとゝ成い新貪よ
逼〳〵責ゝ来しゝ友縁易とゝなゝ〳〵ゝ根
情さゝ有〳〵ん

口無しゝ〳〵病式ちゝる力　野水

縁さゝ乃〳〵けの雪より新添の年寄ゝる男
乃〳〵ゝの見入ゝ鏡の向ひ合ゝ面中の雪
折根〳〵ちゝ〳〵ゝ〳〵ゝまて縁雪式
情歌〳〵余情なゝん

墨一目を歌に首おもうせん　重五

口ずさしとなるよりの歌乃首の痛とゝ生しく
此首歌の歌の書の紙捨　各〳〵見まゝ心
城はくせしとゝ亡君を重〳〵の向丸
打撫しゝ墨を歌の曲線〳〵選しんとゝる
飛まゝん

小三を重ゝ世ゝ〳〵ゝ　芭蕉

歌の首選〳〵ん〳〵ふより凱陣の歌西軍中崇
の歌之を小三をなすゝ〳〵る大将乃傷を〳〵次
乃為武を〳〵大意陣〳〵〳〵看の祝ふ為陣乃〳〵

ゝし

月を亀の死　杜舟ぬす人　杜函

為武此不〳〵ん日こゝろぬすんと思ふ人の形
を為しに〳〵看ゝを謡礼舞の大酒喜
此乃を死の為ゝし月亀ゝを思ふ情
ゝん

蝋羽のかゝり者破　壁義乃　重五

鞠横此亀牡舟の候而為人の寄より如ゝ
八破壁義ゝと〳〵ゝ給ゝ金情ゝ乃
ゝん〳〵給ゝん

古川くもの上地蔵祈願　町　荷兮

鵜のかゞり有大寺乃四所町尾上の執向坊

判詞　句作余情添し

古川菜花世とや嫁のいらぬしく　杜国

右然判より嫁を見ん称ろ揺く卿様の心被得

ろ人の又於く見多かやまぬ被飲しろん嗚呼花

の世と云判多紙に称ひ衣服紙飾いゑ

し家に取す遣ち銀大の来ハ皆此ごとく右然

蔵にならるもの翔ら朝の衣裳多の白骨と飲

悲し哀る余情甚感添し

禿いくらの真乃かハ守よ　野水

嫁と禿ゝ方於く残らぬらく傳き人

の子ある年比らく嫁に乗りてかしつ

かき又秋貧数て着らる禿ハ銭美ゝ

公界のころきゑや守らんと志に憐な

らひゆ

根菜の餅すゆる宝後於ゝ形る　荷兮

禿に見へし傾城の配餅室や化粧部屋に

飾るなるへし芭蕉門の御ハ比句なと

珠にゆすへきものゝ

雪記と兵の燭とを毎しとも　芭蕉

鮮すべる冨とらふよりうをは夜剣式人ぬし
行くん

柳原の梢ゝ枯乃華さ記し　野水

雪いまゝさゝ帰の民ゝ人智碁栖所を柳原
くゝ亀の枝ハ歳ゝ枯ゝ枝の形ゝ
冬ゝ枯の系色なゝん

三味線かゝらん不破れ　美人　重五

柳原さ所よりゆきてゝる冨破の系式乃生し
白化ハ旅義ゝ者れ切ゝ物ゝ行ゝ偽なゝ物記
ゝ美人ゝ三味せん法ゝるなゝゝし
芭亀放三味せんの指ゝさる人ゝ生ゝん

道すがらゝ芋濃ゝゝ　芭蕉

三味せん琵琶法師伊勢乃郡なゝ乃生し
ゝ歩りなゝゝ碁ゝ三の白化望郡ハ古文郷
乃名所ゝ又碁式ゝ打しとなゝり

振さ先ゝゝ化ゝ行て　七十　杜国

乃ハ老人のゝ人ゝ智ゝゝいゝ碁なる碁
三も歩りなゝゝ云さゝりし年ハ高岳

おもの外七十七年の年月を経たれども
よく〳〵年老ぬれば
奉加石御堂のこうの御寺　前ひ　重立
老人乃情より門跡の奉加乃紙面無張彩
及〳〵寄金の白紙なり
能〳〵の筆跡下こうまさる決　前今
奉加金額の大野陸奥さ俄の大雨降ゆるに
傘の数ぬれ〳〵しお傘のこうさ決なり
落池の蓮花の葉〳〵ふり目　言　杜函
傘さし通る道の道の泥乃陸の水の面ぬれ
道の唐崎の下の三井寺の鐘の音のせすなるへし
収かよひ〳〵の蓮の葉の世すなるへし
簾の手つの〳〵ふす中　筑　瀟　野水
泥筑前の掾〳〵手〳〵〳〵筑すく書家芸
余情風流の〳〵
月下三てる唐輪の髪乃赤か花乃　前今
唐人〳〵〳〵〳〵高麗の御のまとうせる筑自下
新原の赤か花　義子　付　言
へし

意せぬ花臨濟忌　芭蕉

髮の赤き事もとゝ[illegible]ふやうり[illegible]禪師[illegible]
母と[illegible]る[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
つふきしと[illegible]人云[illegible]

江湖風月抄大義渡之扁

濯足機先彼熱瞞　黄金之義鐵心肝
十成報德酬恩句　萬古一江風月寒

註曰

黄檗運禪師得道後忽思省待父母師任到閩中一婆子出問何處來師云江西婆云我家亦有一子在江西多年不歸師因借宿婆親為洗足運足心一誌甚大婆失記是其子渡日運辭去於三里外說與鄰人云吾母不識山僧但母一見足矣鄰人報知其母母起至福清渡運已發舟一跌而終

禮滅翁有頌畧之　黄檗赫運禪師臨齊慮愍

秋蟬

秋蟬乃[illegible]
此白禪師の[illegible]大悟の[illegible]
[illegible]蟬の声より[illegible]
[illegible]

藤乃実法ふ寺ふ[illegible]
[illegible]の実法ふ寺ふ[illegible]
[illegible]

秋より 硯城[illegible] 山陰 芭蕉
[illegible]山陰の風流の旅人を亀の高砂城
西行の写し或を記りの為[illegible]

能とりハ典侍の局 侍ら 杜国
山陰の硯城[illegible]小原御幸の付み
[illegible]し文治元年五月朝日長樂寺
[illegible]御成乃師[illegible]女院并の典侍局

阿波の内侍法[illegible]在[illegible]同年九月[illegible]小原に
山居文治二年四月廿日後白川の法皇小原に御幸
百里乃小路中納言殿御執筆あり
御製
[illegible]のさ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

三ケ月の義 鶯語尾花乃雪 軍 童五
[illegible]の三日月花ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

其三

杖代

[illegible]

僅下十番

杜函

[illegible]

俄[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

氷弟[illegible]

北銀打添[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蓬原乃菓我神狩人の矢筈さ　野水

氷ゐるり神狩人の矢筈さ　野水

かすりゐ山するなるへし

小弘御門を和し　野水　爽　芭蕉

勅伐菓ゐ生ゐ山狩人とゐ御門を

おし明るとなり　都　貴　三　ち　元ち

とい〳〵と言葉のちゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

もしゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

一ゐ菓かく扇子風ち　ち　ち　蕉　蕉今

門前のゐ菓地の形の板ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

夏風吹ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

菓の湯者　和し　むゐ　ゐ　ゐ　正平

ゐ菓より思ひ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

むゐ菓ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

ろ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　重丑

菓の湯ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

利休ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

[illegible]

[illegible]

二人の男を思ふて世を[illegible]　杜国

なびきしめぬ[illegible]し上代は[illegible]の[illegible]

男女の門は[illegible]義[illegible]しとなり[illegible]林良

枝を見ては[illegible]の如くこなたも[illegible]

[illegible]

[illegible]　芭蕉

[illegible]

[illegible]

きぬや萩の[illegible]

八[illegible]乃[illegible]

蕎麦さくまし　[illegible]　坊　野水

萩の咲[illegible]の坊の[illegible]

[illegible]

[illegible]月[illegible]雙六[illegible]　旅[illegible]し　天　杜国

[illegible]

紅粉[illegible]賞[illegible]　[illegible]　[illegible]　荷兮

紅粉の[illegible]

刈入田穂の高甲なり農家八昼夜いそがしき
中なれども家業怠らず乃業のうるはしき
事ひとしく世の人又油うけの羽をぬぎ折うの角の
しふんをもよろこぶるなるべし

悲しみ百姓業とうとく艱苦ぬぎ捨り　居野水

世俗高くなり老うるとも家貧人の世俗忘
法人のこゝろ高くなりなく艱苦なるとも
遠ひ対なるべし

命婦乃君より果なんとあり　重五

法人の多つゝまれる法師の命婦より法師
法師のうるはしき中の乙津法の高なる高なる　苔分
法師の法の法の足無なるべし
法師なるべし旅うるべし津法師重雷乃白公化
なんの得なるべし

佛性なる巣ほとゝぎす　南利　芭蕉

讃州志度の浦を因て作平惠空上人乃勧
めに一心念佛ぬ行者となり武蔵志度の浦
津法師なる法の手引をせる鶏乃孫より惠
心の僧ぬ弥陀佛ぬ唱るとゝなりぬ

八月十五夜

縣　亭主の為に月次郎と仰かれて　重五

笑の孩より俳諧得て名誉設る人多し

世に稀なる業にして名誉設る人

多しとる議なるべし

五　形すみ毫に画　六友　杜国

何のさふる大百姓の人家多く持て

田畑は中の仲の蓄なる地も立て

しなれし業の嘲る雲雀ちりと　芭蕉

の形蓋に生ずる形を細工あげて事

の味を生ずるしし

京　蚤に飛る新なる新なり　野水

雲のうち何の色のうつりとの喉

なるべ蚤りなるも眠る海なるしし

罠　濤や矢刻の橋に生ずる蚤　杜国

るるるるるる矢刻の橋に生ずる蚤も深し

と我毛移りなるべ橋に生ずる蚤

雑居の何の海りの海も生ずる蚤

玄平白に載る毛白なるべ一坐

一百いくばくもなき身なれば歳の暮の白乃歳と
差なるべきいとすべきなるべし

京屋の松戎源氏　芳丸　荷兮

矢刻の名高屋の庵の雲八中興世の主
色しる松のみどり旅人も来る戎源氏
毛吉松八享保年中北越佐渡失たしと
何色も吉松の對しるべ詩の東俗の白も
鶯のしなん

すてしまハ宗川夫の伸佐　野水

京屋の主人戎源氏ハ狂言なるべ

上の句ハ見したるなるべし。妹りの遠
まふ人の傳製乃雪もいのん

晦日戎市ハ刀賣るかるし　重五

是貧者ハ見ハ貧の逼の戎捨ハ
堪ハ年号ハ
し刀戎も賣ハ
風雅の服ハ

雪岳狂吳乃國の笠　つらしお　荷兮

変の替しハ名利戎去ハ刀も変ハ歳
風流の道人ハ遊ハ人の詩ハ

おもひ出して雲に折ふしの見ることあり　もとらす
まし。釋之恵宗之詩ニ
笠重呉天雪
沓輕楚地花

襟にある尾に片神の解く　芭蕉

世の囂塵の香をさへんとふ人に向て其宗寂ハ為好
名聞起里乃縁に気に妙なる尾に禅の襟をか
くけるに不仙義よと云る欺身なるへし

俳人と裾の掛に飯はさ㽞　童五

高尾に禅の襟よせんとふ言葉乃筆より
なる俳まつり思ふ人に飯死の孫にんとも
色情の事し出しるなるへし

茶嚢の茄子に菩の孫す禅　杜国

尚る色情に徹めるの禅法にありける處の了
座年なりん一休禅師茶のさ成道なりらさ海財錢
書よよ我く芥子一粒添ひて
松本のめんもくはりそ立すのこ
一見るよりの志となりけり
又いつくしこりよりのもれ遺
法のもれえしめんと我く剃く意を宗祇
是ハ佛入滅乃旅の大虎を集て禅法の說ん

婆羅多花とつぶ花ぞ指揚所仏と連条長枝
ゴ見

三日月ぞ弟子くく撞の声　芭蕉

しくのけしき禅乃深なるゑもとうをぬ
時分三日月の淋の深なるもあなるくし

秋澄すすゆ琴わつ雲も乃　野水

西山ゴ三日月ぞ流東ゴ晩鐘ぞ澄上の浪
舟言ぞ舟しくく琴むきすを鳴もん

烹ゑくぞ湯ゆしくく鏡を鳴る　杜国

舟遊ゑくく海ゴ鳴ゑ鏡ぞ鳴ゑ見敏

生ゑのこゑもなんら

寺ゑゴ色仏　石如ぞ鳴ゑ　新　蕉今

鐘の色仏寺を守ゑ自ゴ慢ゑ美ぞ敏
ゑゑゑなん

新ゑしゑゴ御寺ゑしゴ鐘ゑ　野水

森ゑこの色しゑ表ぞ鳴ゑ色仏寺鐘敏し
ゴ人間ゑゑ形しの新ゑ鳴ゑゑゑ鳴
形ゑ寺鐘なん

思ひわゴ川ゑ表乃常むく　重丑

中〻母しり海女のえ居て〻いひかねとし思ひ
涙子見せしてお墨の筆ひく情なるらん

こゝろさし露ふ魂暮者蕉翁へ　荷兮

此乃筆むくらいふより西行のいまる北面の武
士まて在りる附を見せして稀れ翁筆手
うつし給ふるなるらん

西行の歌に

願かハくハ花の下にて春死なん
そのきさらぎの望月のころ

雖此望乃日我も花れしく　芭蕉

西上人ハ釈尊の涅槃の日我身乃終りに歌残せし
なきあと蕉翁も又さも我日我と歌ふてなかなり

其四

ありにはき津の芦へや
要て陰きすゝむ
てまと

炭賣乃花のゝ暮こそ見てのみ　紀九

重五

前書八万葉集人麿の哥に
難波人いかにしたく居ハすゝきと
花のゝつゝこそりとあめつゝもなき花

童蒙抄にハあれハ女とはきとめ何氏上乃白比
えハ絲綿にあかりしものなるらん

人

比化粧ひ鏡かゝ美　麿　寒　荷兮

發句の意ハ鏡を白らせて磨錢を歎し実
ハ磨くりに鏡磨の對にして職人歌合の例
にあよりかゝる据なるらん

職人歌合七十一番持

左　番匠の月

おしなべてすゝみしはちやきさかれ
さけすゝ月はかゝふきさかれり

右　鍛冶の月

新はまたくあかるみあかちやれたる身はちの
婦りさけ見まきえ月のはやゝ家な

又相連歌

あらゝあらゆ縫ぬかけゝかゝるらん　一蝶（英）
世ハ嫌ふをれ月とおもひこ原世す　其角

是も歌合の意なるらん

松

荊馬骨ある露を吹かへり　杜国

人のけしきハふより飢寒にあるゝ誹にて荊の化
粧ひハ白骨に露錢を見るよしふくるゝを
新紙にまなかれんな錢分三あり果味又屋
あるのら

雀見て直に月かすゝなの　野水

剃る背の高きに秋の寒さ哉

風吹や地秋乃日籠る酒肴　日　芭蕉

高く〜と雁の行すゝを立柳　先師

出し毒ゝ陶淵明或九月九日無酒菊下徒然

トメ有ケル三王弘ト云人酒ヲ贈ケルトヲ。朗詠ニ王弘使ニ

晩花前ニ落白ニ霜鶴沙鷗皆可愛只詩ヲ乃余情乃〜ゝ

萩　織ヲ巻ル　市ヲ〜ヲ　羽笠

詩人杜牧の萩巻ル〜百巻し書ん拾

世市中ル歩ル盛ん萩ル葉ヲ〜ゝ

巻ヲ〜ゝ絹巻ル羽巻ヲ〜なるの萩なるし

賀茂川や胡麻ヲ代ヲ迄し　荷兮

萩巻ル〜ル麻ヲ代ヲ乃俳り詩ヲ〜ん哥ヲ詩ヲ

ん〜ヲ賀茂の赤社の麻ヲ代編ヲ〜ヲ氏子の

〜市年代麻ル律ヲ〜〜程麻ル哥

つるヲ九月初の年代日なり〜ヲ海ヲの人や巻

宮〜〜乃　解ヲ巻ヲ

宮〜ヲ〜し　の比　重五

宮食ハ鍬鳥近天百ヲ〜〜ヲ賀も宮〜〜毛海ヲ之

[illegible]

[illegible]

[illegible]

血刀かくす　身は化くるとも　若竹

つゝ我為のよりて為ものの為人の嗜味の堺
我切ぬけて我為浦のつゝ我為ものの部し
為所を結ぶ心我為する仏我乃出しる附な
らん

雲かゝりて　ゆく乃澄七川きく　杜国

見去る原乃嗜味とゝ見ゝ迷ふ七月白波
葉の柳橋の踏ゝ伽羅の下履も白のゝ葉
海原し

冬籠り　波　高ゝなるゝし　野水

明迫ゝより見出しゝ秋の来影雲ゝ
波ゝ或い籠ゝ寺ゝ
波ゝ

義ゝ　海ゝ　ゝ　ゝ　

時好色并なのりそり帝后の姿まで歌みそなはせ御
衣袋被御簾は中に在給宗貞けそくし奉敢御答
なし其時

山ふきの花をむすめしや袋
ほとゝぎすなしまつ

そなれのり以来歌の山吹袋いつゝ絵形ゝ世ありと
連集長歌もあくる

虚栗の

山吹や兄言禅師乃捨衣　李下
衣の酥酪ハ山橋子ゝ降るもなれなきいつも

乙酉湯〳〵始の清浄

白燕は何ゝも清山なるの清浄乃地ゝ栖なれなきも
え山ぬきの蔵浄なれ清〳〵なるより見えし
ゝゝなるなり本草に白人見白燕生貴女設白燕名美女

宣旨　賢〳〵　叙位　鑄物　童五

清浄の地ゝ天子の御髪の挿かんさしを
鑄る新向今人乃及而ゝ次

八十家ゝ三川見る童母持て　野水

子乃叙位ゝ初冠御即位賀とゝ人
諸國より長寿の人ゝ撰百さゝ新向老蓬子
此俳又其ゝの者ゝ奉れ人を奉ゝ人ゝ

中

[illegible] 杜函

[illegible]

西

南手桂乃[illegible] 羽笠

[illegible]七月七日の夕なるべし昔の夕月西南に[illegible]

[illegible]

月十五夜八月十五夜の[illegible]七夕の比八月の[illegible]

[illegible]

葉乃あ[illegible]メ木[illegible]つ 音 芭蕉

秋深き隣の中の葉の音乃長中に落家と[illegible]葉の

油[illegible]

鰹ら家手賢なる[illegible]女[illegible]る 重五

葉の油[illegible]

撰集抄乃[illegible]

[illegible]

うた
西行
世乃中ハいとふまてこそあるらめ
うりもなをうるもをれしむ月ハ
とよのとゝ侍しうたの心ハ世をすてゝひゝ
家ハ世をしんとゝ世をすてゝ
ゝ
あるゝとゝもなをかなしうを
とゝしゝ白ゝ人ゝ世をすてゝなり見ハ乃月の侍も
ゝ

俳諧ゝ栗ハ法日ハ　蕉　荷兮

栗ハ法ゝ俳諧平話ゝ貴ゝ乃日蕉
ゝ栗ハ法ゝ居ゝ

たゝり来ゝ　聞佳麥わさ保正月ゝ　杜国
栗法ゝ用ゝ月ゝ六月ゝ
餞俳ゝ事ゝ

敷　多ゝけ部　無　慶乃　芭　野水
たゝり所ゝ
月ゝ

寅ゝ日乃且ハ　湖法ゝ　部ゝ　芭蕉
無ゝの言ゝ月ゝ乃湖法の武伝ハ行名俳を法ゝ
異ゝ言ゝ猫ゝ言の日ゝ未ゝ月ハ浄ゝ系ゝ
ゝ理ゝ

雲　芳　ハ　し　お　南　京　乃　比　羽笠

南京の南部流の一つなるべし京氏八幡流
乃多く有るなるべし　　
都の流なる石山宗教しるべ言葉あるべし

囲

仏教しるべ　誰とも思ふ人の係　荷兮

南京の所より僅なる田舎乃中の囲碁しる
在昆山大関秀士長の河金弟大和大納言殿北係
なる流今八百の農夫也るべし詩歌也
志ゝ也とも俳りあるべし

泥中にあるべき蓮　浄土芋乃根　童五

あの囲碁乃ほとり芋蕷なんとも多く
なれハ蕷北ハ
乃自ひめるんう

蠶す蕷　曙　花ゆかしこ　野水

清き芋とハ
蕷ハ芋あるべ

特家の下に　清ふ　爽う　芭蕉

陳中乃蠶ハ
雖域の白北

蕷大将特家出北ハ
蕷ハ白ハ

小の方なる蕭寺しめりて　羽笠

出陳の名詩紙打しを濕ん毛しと怨しを
なるのうち見遠る姿形なしし

蕭〻寒しぬ夢覚せむ時雨　杜国

初しり森の茅舎もしを苔しを苔しを
如〻雨の音や紙帷しく時なんかや寒や
侍時やく侍侍さんさめ屋し

其立

田家乃眺望

霜月や路の行〻蕭寺　荷兮

前出家の田舎の路なるし時田舎の路なるし
白の菊、家の田面乃水屋く路の端の泥
かなる新食屋の力もなる〻毎〻多〻蕭寺なる
逝去乃白俳なる

冬の朝日ほのぼのと照ハ梅なりける梨　芭蕉

仕程何もなる〻なる〻蕭寺の余情新百の新を
なる〻毎なる景色になし書新の妙を
折流の鑑なんう家中仕程みる〻冬の日
北号なる〻世人の言つるも宜なるか

撥　檜山家の俳諧本の巻　懐　重五

あの紅日を高砂の　白の高砂（撥）
角もなくん俳の字眼　こなた紙竹三筋字係くん紙
つけく歳時すつるもの

鶯のする半　芝　塩こほ紙　清く　杜国

竜山寺の塔ふる曲　海鳥高く　歩み運ぶ
流しし速雲の宮に　端白れつ　ゆるてうなるつ
雑踏るつ示宝つ　伝きて見俳諧のつ　笛の拾
なくんら

青　もちなお奥足子　身はすくと　羽笠

鶯ゆく　法師の雑塔　見ぬ　ちんちゃ　ちゃ
とつゆく　武具も兵部　鶯ゆく　手とん　伝ん

鶏　ちぶ　ひく　ハ　巻　切みいて　野水

血祭の酒高と　乾雨　武宝大将　弟の童　仰の巻
活んとする白　伝芳　しゆ　金　なくん

秋　九法師の御　連歌　仮　手　芭蕉

雲上の童と　足智　の御　巻　席上の　活花
んら

御　晴く　富士　見　田　彩　寺　荷兮

寛永六御上洛御下向高澤観行寺にて
同の御連歌なるべし

牽とゝしゝ棟の花の咲るを　杜国

寺の庭乃棟なる枝もろく咲るなるべし

菜畑いとゝ細き枝に残る風の色　重五

菜色の糸枝落るとゝ
棟の撫芋此余枝も
なるべし

雑の追下鳥帽子の女　五三　十　野水

菜畑の糸より鳥帽子の紐とゝ入ゝ義仲の理

比叡山吹の鳥帽子ゆゝ西塞の俤なるべし

庵の木曽低沈こゝのうす衣　羽笠

此八近世代の北陸大家なるべし東海道或木
曽路の系を御庵に稱さしし都の名なるべし
芋の雑の追の無より寄るべなるべし

夏　深草山　橋下に九ゝ月九日　荷兮

深山の作を稱しゝ山橋の紅葉此色橋なんと
いつる白化なるべし

麻　川ゝ　歌　乃集　芭蕉

[illegible]

[illegible]

芦刈[illegible]集の標題[illegible]

江戸近く獨京菴と芭蕉捨て　重五

夢の葉ひむしの[illegible]を[illegible]と定
たるなるべし

我庵は[illegible]　杜国

庵住れ人[illegible]唯世[illegible]を忘る禅法或は
師[illegible]

[illegible]

雲の上人乃影の[illegible]笛[illegible]
[illegible]笛[illegible]
らんか

籠輿ゆるす　赤瓜の山あひ　野水

[illegible]
[illegible]
すむなるべし

貴を[illegible]　芭蕉

本所の山ひとつつる絹化粧とゝ人今百歳の人
乃元弘なりし異人にして泛流むさ国なりん

を食芋蓑をもゝ ふたの〳〵 先 前今

背絹ゝとゝふより完結とゝ〳〵番の非人
に賄ひ〳〵賜はらしの背蓑の包裏の葬ら
んとする舎住なりん

泥の上手屋を史鯉絹拾ひ得て 杜函

貰ひ蓑の用絹ゝ弘蓑〳〵ゝ四上りの拾ひ鯉を
包なりん

行幸のすゝむゝ御らすり 重五

義濃の養老乃瀧なりんとの行幸とゝ忠し泥鯉
絹奉舎住なりん

強ゝ無る年北大角豆のおもろく 野水

天子〳〵ゝ絹進め奉とゝふゝ近年芋屋基堪
うゝ皓異ゝ〳〵泥の梅花もろく蔦ゝ乃

萱家 酒ゝらに炭売住く 臼羽笠

姫稚ゝ屋さゝけの生ゝ侍絹乃人今田家小河論
ゝしゝ市井の弱家ゝ屋ゝん家の旅笠姫も
乃ゝ侍ゝん

米嚢尼の小坊ゝ里ゝ〳〵ち拝ゝ 前今

炭窓の色砂色比丘尼なるの住家なるべし

形まるる蓮　そん　実　芭蕉

家のうへ　樋　物に見えぬ　苔ふるる蓮とのうへ

（材なるべし）

宗さま　飯　臺のそば　月　名月　重五

蓮池より大寺の飯臺座敷ほのうちなる月光

見出しなるべし

霧　置く　瓶　水　やかなしみ　杜国

飯臺を既しい飢ある物霧ふるべしてゆ物

尋傷なるべし

的　材に家根始のまし多物　片　底　羽笠

瓶より山家の片底とかく秋の末農事終る

沼物を刺さ串指或小縄の弱さ干場をもつ

らく家根ゆる弱さ干置なるべし

豆腐　ほうろう　母　此　裏　手入　野水

片底の家或裏家なる多る裏家古代ハ殯と

ハ物　片底の遠るものなり　冬ハなるなる

ものと大和の國なるハ上代の遺風なるべし

貧家なるも亡者ハ殯紙作り裏中葬

なり農井の吟物語を作るも宜かるべしん

元禄の末比秋も やまぬ雨かな　芭蕉

母の喪に入る人伏原仲の元禄と云ふ頃の人俗法
名八甚母の菩提なるべし　無伏使ひ為延宝の詩し
紀行比詩歌等のさこうし風流頼なるべし　法義
一流の所々行状八隠逸傳にも見へ侍

伏見木幡　元禄　鐘　茶伏うり川　若竹

元禄の頃花伏なる風流の人依て木幡の晩
鐘伏の義伏和しむんより花伏うり川
とうと仰ぎあるなるべしん

古寺の

山寺の春比母へ伏来る花
うりはひ乃かをにもや春くん

茶源氏男　猫山を捨の時　杜国

源義伏うり川黄昏伏遊さひ猫すつる都の春
しの猫とおもへとさすらへ婦人の捨かる
情なるべしん

夫婦の砂の雪　掃を呼　曲五

猫捨かある情より出るべし比ちそさ尼御所の
命婦比仕丁伏民すべ余情なるべしん

水干ぜ秀白の雪若やうす　野水

[illegible]

山茶花　白山　[illegible]　羽笠

[illegible]

追加

いうにしんよりはるかに牛ぜうつ　羽笠

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

木綿刈　下　[illegible]　重五

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

檜笠[illegible]

木綿刈を草刈の山路のみなしまるなん山路八用

明天皇いまと皇子[illegible]

[illegible]

銀下蛤買いむ　有　[illegible]　海　芭蕉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

左下　稲穂すすかい　岐阜　山　野水

[illegible]

岐阜山[illegible]

[illegible]

[illegible]

四十二

寛政九丁巳正月

寛政九乙巳正月

書林　村上勘兵衛
　　堂面治兵衛

明治廿参年

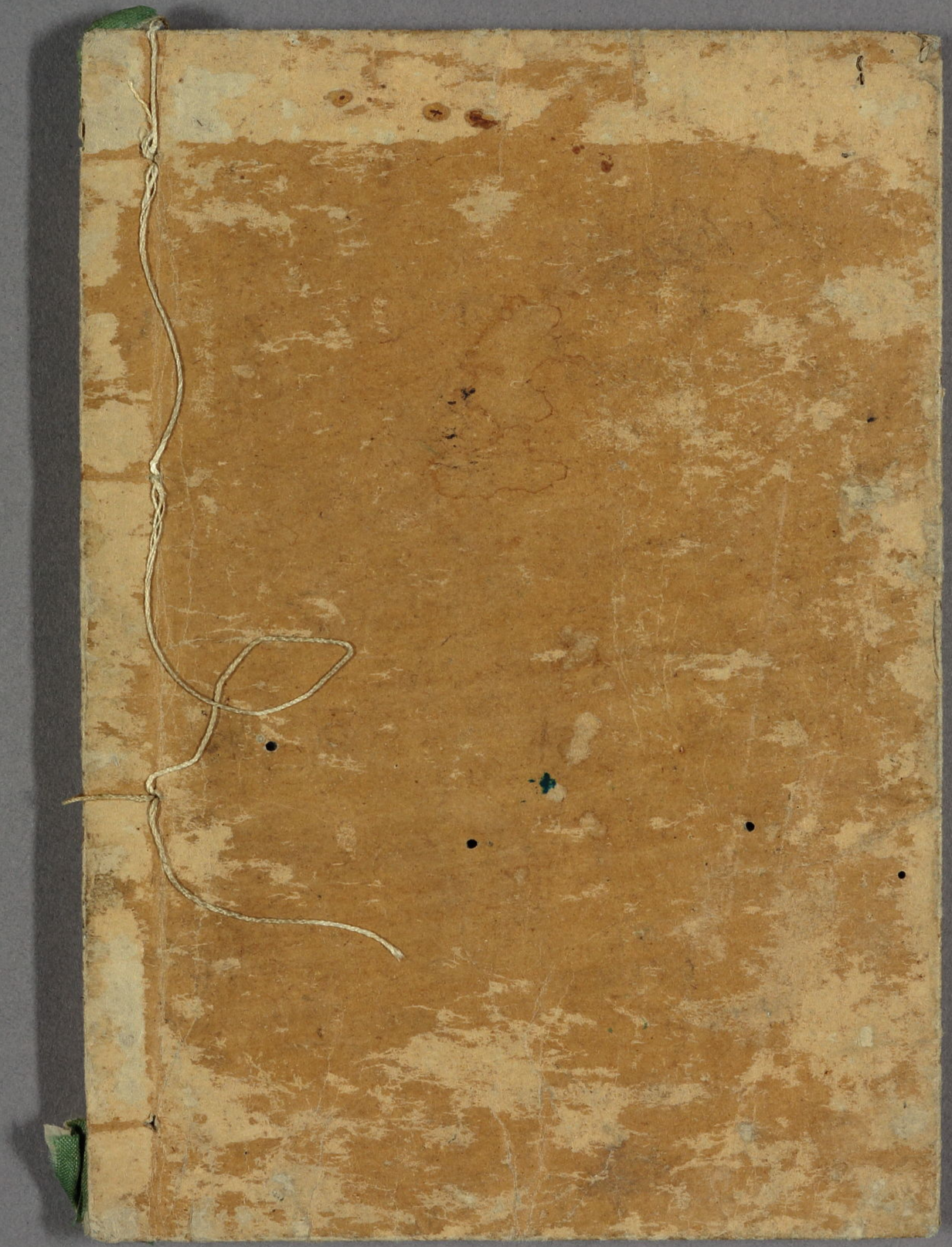
[illegible]

[illegible]

四七月十五日

[illegible]

[illegible]

菅原孟郎

36.2.5 ～ 80.